

職業レディネス・テスト[第3版]の開発

VOCATIONAL READINESS TEST

独立行政法人 労働政策研究・研修機構

主任研究員 室山晴美

1 はじめに

「職業レディネス・テスト」は、昭和47年に公表されて以来、中学校・高等学校での進路指導、また、職業相談機関での職業指導において、生徒、求職者の自己理解を深め、職業意識を啓発するための道具として活用されてきた。初版の公表後、平成元年に改訂があり、第2版（「新版職業レディネス・テスト」）が発行され活用されてきたが、それから今日に至るまでの間、中学校、高等学校の進学率は年々上昇し、就学期間も長期化するなど教育の場の状況も大きく変化した。また、情報化技術のめざましい発展に伴い、多くの職業、職場において、情報化、自動化が進み、職業の世界も大きく様変わりした。こういった教育、社会生活の変化が、中学生、高校生の進路選択や職業選択の考え方に大きな影響を及ぼしている可能性は高い。また、検査そのものについても、各尺度の項目を構成している職業の表現が的確ではなくなったり、理解されにくくなっていることも想定される。

そこで、平成16年から改訂のための作業に着手し、このほど第3版が完成した。第3版は第2版までの基本的な理念、すなわち「自己理解を通じて職業探索へ、職業探索を通じて自己理解へ」という理念は継承しつつも、新しく収集したデータで尺度の見直しを行うなど信頼性を高めることを心がけた。加えて、若者向けの進路指導、職業指導のツールとして使いやすい検査になるよう工夫を重ねた。本稿では、職業レディネス・テストの内容と新しく完成した第3版の特徴を紹介したい。

2 「職業レディネス・テスト (Vocational Readiness Test)」の内容

「職業レディネス・テスト（以下VRT）」の「職業レディネス」とは、職業的発達における準備の程度を示す概念であるが、一言でいえば「個人の根底にあって、将来の職業選択に影響を与える心理的な構え」と定義することができる。VRTは、主に中学生、高校生を対象として、職業に対する興味や自信といった「職業志向性」と日常生活の中で個人の行動の特徴を示す「基礎的志向性」の2つの側面から、「職業レディネス」を把握する検査である。

(1) 構成

VRTは、「職業興味」を測定するA検査、「基礎的志向性」を測定するB検査、「職務遂行の自信度」を測定するC検査で構成されている。「職業興味」と「職務遂行の自信度」は、アメリカのホランド博士（Holland,J.L.）による職業興味の6領域の枠組みで整理する。「基礎的志向性」は、対情報志向（Data）、対人志向（People）、対物志向（Thing）の3つの枠組みで整理する。職業興味の6領域とDPTの示す内容を表1に示す。

(2) 実施方法

検査は、問題用紙に書かれた質問項目を読み、それに対して回答用紙に答えを記入するという紙筆検査の回答形式をとる。制限時間はなく自分のペースで回答する。結果を整理するために、回答後採点し、プロフィールを描くという作業を行う。中学生、高校生でも自己採点が可能である。検査の実施時間の目安は40～45分程度である。

表1 検査結果の整理の枠組み

A検査、C検査：職業興味（Hollandの職業興味の6領域）	
現実的興味領域（Realistic）	機械や物を対象とする具体的で実際のな仕事や活動を好む
研究的興味領域（Investigative）	研究や調査などのような研究的、探索的な仕事や活動を好む
芸術的興味領域（Artistic）	音楽、美術、文芸など芸術的領域での仕事や活動を好む
社会的興味領域（Social）	人に接したり、奉仕したりする仕事や活動を好む
企業の興味領域（Enterprising）	企画や組織運営、経営などのような仕事や活動を好む
慣習的興味領域（Conventional）	定まった方式や規則に従って行動するような仕事や活動を好む
B検査：基礎的志向性	
対情報志向（Data）	知識、情報、概念、データなどを取り扱うのを好む
対人志向（People）	人と直接関わっていくような活動を好む
対物志向（Thing）	機械や道具など、物を取り扱うことや戸外での活動を好む

3 改訂の方法

(1) 改訂の方針

VRTの改訂に際し、従来活用されてきた第2版の開発に携わった研究者の他、VRTを熟知し、実施経験の豊富な大学や高校の先生方で構成される委員会を組織した。委員会の中を、手引き部会、尺度部会、ワークシート部会に分け、各チームで作業分担しながら、それぞれの作業の結果を全体会で報告し、改訂の方針や内容について検討するという形式で進めた。様々な議論の結果、改訂の方針として決定されたことをまとめると次の4点に集約される。

- ① 検査の構成については、第2版と同様の枠組みとする。
- ② A検査、C検査については項目の差し替え、B検査については尺度を新しく作成する。
- ③ 自己採点方式は踏襲する。
- ④ 第2版の「結果票・結果の見方」を全面的に改訂し、生徒自身が作業し、一定レベルの解釈ができるワークシートを新たに作成する。

(2) 調査の実施

尺度に関しては、新たな調査項目を含めた調査票を作成し、2回の予備調査を実施した。その後、平成17年に全国の中学校、高等学校を対象として、検査の基準を作るための標準化調査を実施した。まず、学校基本調査（平成16年度）に基づき、次の手順で対象校を選定した。

■中学校

- ① 全国を「北海道・東北」、「関東」、「東海・中部・北陸」、「近畿」、「中国・四国」、「九州・沖縄」の6地域ブロックに分ける。
- ② 学校のタイプを生徒数300人以上、300人未満の2

群に分ける。

- ③ 全国で6,000サンプル収集を目指し、Bの分布に基づきブロック別に学校数を決定する。

■高等学校

- ① 中学校と同様に全国を6地域ブロックに分ける。
- ② 学校のタイプを学科により7群（「普通科進学率70%未満」、「普通科進学率70%以上」、「農業・水産」、「工業・情報」、「商業」、「家庭・看護・福祉」、「その他・総合」）に分け、学校数・生徒数分布を作る。
- ③ 全国で8,000サンプル収集を目指し、Bの分布に基づきブロック別、学校タイプ別に学校数を決定する。ブロック別、学校タイプ別学校数を基に厚生労働省・文部科学省の協力を得て、該当する学校の推薦をいただき、推薦校に関して、原則各学年1クラス全員を対象とした調査の実施を依頼した。最終的に中学校38校、高等学校62校の協力が得られ、中学生約11,000名、高校生約17,000名のデータが集められた。調査対象校の内訳は表2のようである。

(3) ワークシートと手引きの作成

ワークシートについては、生徒が授業時間内に作業することを念頭において、3つの基礎的ワークと1つの発展的ワークで構成されるスタイルとした。尺度の中身とワークシートが完成した段階で手引きをまとめる作業に入った。従来のVRTの利用者が引き続き利用することを念頭におき、これまでの利用者が違和感を持つことがないように、できるだけ第2版の手引きのスタイルを踏襲しながらも、新しいデータを加えるなどして使いやすい手引きになるよう書き直しを行った。

4 VRT第3版での主な改訂点

(1) 尺度の改訂

職業志向性を測るA検査（職業興味）、C検査（職務

表2 調査対象校の内訳

学校・学科タイプ		中学校 (38校)		高校 (62校)						
		300人未満	300人以上	普通進学率 70%未満	普通進学率 70%以上	農業・水産	工業・情報	商業	家庭・看護 福祉	その他・ 総合
地域	北海道・東北	3	3	5	4	0	0	0	1	0
	関東	4	6	6	6	1	1	4	2	1
	東海・中部・北陸	4	4	4	2	1	2	1	0	1
	近畿	2	4	4	1	0	1	1	1	0
	中国・四国	3	1	2	1	0	0	0	0	0
	九州・沖縄	1	3	4	2	1	1	0	1	0
合計		17	21	25	16	3	5	6	5	2

遂行の自信度) および基礎的志向性を測るB検査の内容に関しては、以下のような改訂を行った。

① A検査(職業興味)とC検査(職務遂行の自信度)の改訂

A検査では具体的な職務内容を記述した54項目を使って、職業興味を測定する。例えば、「ペットの犬の毛をカットしたり、洗ったりする」という項目に対し、「やりたい」、「どちらともいえない」、「やりたくない」の3件法で回答する。C検査では職務遂行の自信度を測定する。A検査と同一の項目に対し、それをうまく行う自信があるかどうかを3件法で回答する。A検査、C検査は、具体的な職業についての知識や理解がある程度備わっていることが回答の前提となる。項目の内容が具体的な職業名と直結しているためである。

従来の第2版についてはA検査とC検査の項目に表現が古めかしくなっている部分がある、今の中学生や高校生が身近に感じられる新しい職業についての記述を入れたほうがよいという指摘を受けることがあった。また、これまでに集めてきたデータを分析してみると、項目によってはその項目が分類されているRIASECの興味領域とは違う領域に関連が高い場合があるということがわかった。そこで、改訂にあたっては、差し替えの候補となる18項目を追加し、72項目で調査を実施した。この結果、第2版で使用していた54項目のうち、12項目に変更があった。10項目が新規に追加され、興味領域が変更となったものが2項目ある。結果の整理の枠組みとして、ホランドによる職業興味の6領域を使う点は踏襲した。

② B検査(基礎的志向性)の改訂

第3版の開発にあたってB検査をどうするかについてはかなり議論を重ねたところである。基礎的志向性の測定をやめて職業志向性のみを測定する方向への変

更も検討した。しかし、中学生、高校生については職業への興味が十分に育っていない場合も多いので、日常生活での興味関心をとらえることは、個人の特徴を知る上で重要な手がかりを提供するという点で意見がまとまり、基礎的志向性の測定を維持することとした。ただ、B検査の問題内容や回答方法は大幅に見直すこととした。

第2版のB検査では、「旅行を思いついたら、まず…」という文章に対して、3つの選択肢があり、そのうち自分に最もあてはまるもの、最もあてはまらないものをそれぞれ1つずつ選ぶという方法で回答させていた。それに対して、第3版では、「学校の宿題でわからないことは参考書で調べる」など、日常生活に対する具体的な行動について記述された短い文章があり、それについて「あてはまる」か「あてはまらない」かのいずれかで回答させる。それに続く結果の整理では、第2版と同様に、DPTという3つの志向性に関するプロフィールを作成させる。ただし、第2版より発展させた点として、DPTそれぞれの尺度の中身を複数の下位尺度で構成したことがあげられる(表3)。下位尺度の結果の整理は、ワークシートの特別集計(WORKプラス)で行うが、DPTだけで見るよりも、個人の特徴がより詳細に把握できるようになっている。

(2) ワークシートの内容

従来のVRTでは、採点して各尺度の粗点を算出した後には、「結果票、結果の見方」を使って粗点をもとに職業興味の6領域と基礎的志向性のDPTに関してプロフィールを描いて作業が終了し、詳しく解釈をするための作業は特に用意されていなかった。第3版では、授業時間内に中学生、高校生が自分で結果の整理をしながら解釈を深められるようなワークシート(A4サイズ見開き6ページ分)を開発した(図1)。

ワークシートの中身は以下のような4つのワークで

表3 B検査DPTを構成する下位尺度の内容

基礎的志向性 (DPT)	下位尺度
D 対情報志向	D1 情報を集める
	D2 好奇心を満たす
	D3 情報を活用する
P 対人志向	P1 自分を表現する
	P2 みんなと行動する
	P3 人の役にたつ
T 対物志向	T1 物をつくる
	T2 自然に親しむ

構成されている。

- ① WORK1：A、B、C各検査のプロフィールを作成し、それぞれ興味や自信が高い領域や志向性を確認する(図2)。
- ② WORK2：職業興味の分化度や興味と自信度の関連をそれぞれの領域に関して確認する(図3)。
- ③ WORK3：A検査の職業興味の結果とB検査の基礎的志向性の結果の両方から、得点の高かった領域に関連する職業名を確認する。さらに、その中で興味をもった職業名をチェックする(図4)。
- ④ WORKプラス：A検査の職業興味とB検査の基礎的志向性に関して特別集計を行い、それぞれの特徴

を詳しく検討する(図5)。

とりわけWORK3では、これまで手引きの中でしか記述されていなかった具体的な職業名との関連づけができるようになったので、利用者にとっては自らの興味や志向性に関連する職業にたどり着けるという意味で極めて有効であるし、これを素材として職業に対する視野を広げることも可能であろう。

さらに、WORKプラスは発展的な内容であるためオプションで用意されているワークであるが、基礎的志向性の内容を下位尺度に分解して検討することができるので、自らの行動の特徴を具体的に理解するために役立てることができる。例えば「対人志向性が高い」といっても、人との関わり方にはいろいろなやり方がある。Pの対人志向の場合、下位尺度には、「自分を表現する」、「みんなと行動する」、「人の役にたつ」という特性が含まれるが、Pの得点が高くてこれらすべての高いとは限らない。例えば「みんなと行動する」と「人の役にたつ」は高いが、「自分を表現する」は低いということもあり得る。下位尺度に関する得点を見ることによって、その人のもつ対人行動の特徴をより詳しく検討することができる。



図1 ワークシート「結果の見方・生かし方」

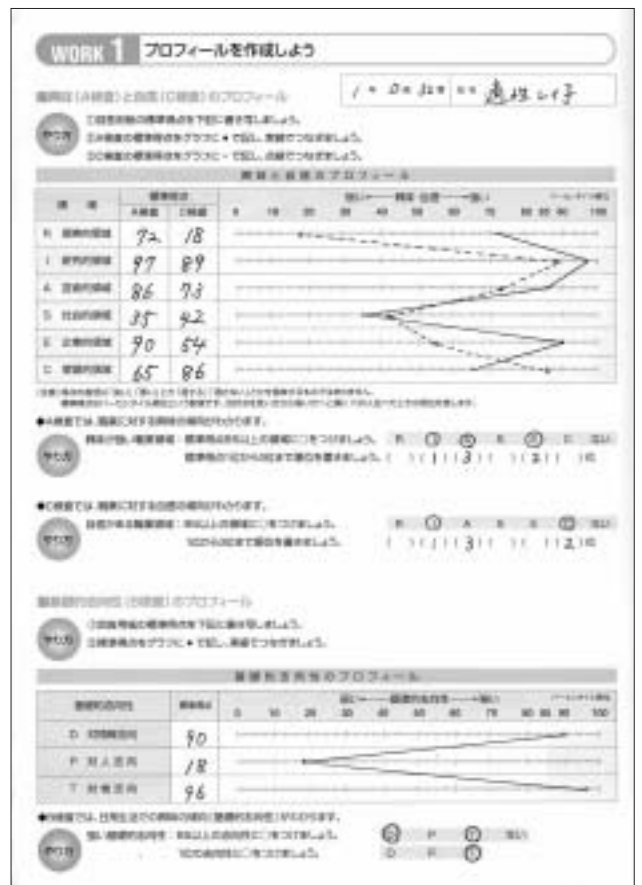


図2 WORK1：プロフィールの作成

5 おわりに

以上、VRT第3版に関して主な変更点を中心に検査の内容を紹介したが、最後にVRTの特徴と利用上の留意点について触れておきたい。

(1) VRTの特徴と活用の可能性

近年、いわゆるフリーターの増加や早期離職者の増加を踏まえ、若者に対する職業意識の啓発やキャリア教育の重要性が指摘されている。学校教育や職業相談機関でも若者の自己理解を促し、職業選択を自ら行う力を育成するための支援策が具体的に検討されている。

VRTは、職業に対する興味や自信を測定したり、日常の行動傾向から自分の特徴を把握するというアプローチをとるため、受検者の心理的な抵抗も少なく、実施後にネガティブな影響を与える可能性も少ない。中学生、高校生を対象として開発されているため、わかりやすい表現で作られており、職業への関心があまり発達していない大学生等の若者に実施することもできる。そういった意味で、幅広い対象者に安心して使える検査であり、学校や若年向けの相談機関において生徒や求職者の自己理解を促し、職業意識を啓発する

ツールとして広く活用できる可能性を持っている検査である。特に第3版ではワークシートを付加したことによって、受検者が自分自身で一定レベルの解釈を行うことができるようになったことが大きな強みであろう。

これまでのところ、進路先や職業選択の方向付けを目的とした進路指導や職業相談の中での活用という使い方が多かったようであるが、それにプラスして、具体的な進路を決定する時期よりも早く、自分自身について考えてみる機会を与えるという意味で実施してみることもよいと思う。生徒の自己理解を促し、職業への興味を刺激するという点で有効ではないだろうか。

(2) 利用上の留意点

VRTに限らず心理検査を使う際には、様々な利用上の留意点がある。ここでは、特に1つの点を強調しておきたい。それは、VRTで得られた結果を固定的に解釈しないということである。VRTの場合は、中学生、高校生を主な対象として開発されているが、この時期の生徒は心身ともに発達の上途にあり、検査で測定されたその時点の職業興味や志向性は、将来に向けて変化する可能性が高い。そういった可能性を前提として結果は解釈すべきであり、得られた資料は今の時点での興味や志向性を反映した暫定的な資料としてみなす方がよい。固定的な解釈を避けるためには、得られた結果について、実施者である教師やカウンセラーが、検査を受けた生徒や求職者の感想を聞いたりするなど、一緒に話し合いながら解釈していく姿勢が重要であると思われる。

参考文献

- 1 松本・室山・館・安達・上市・本間・笹・杉森・亀井・山形 (2004) 「職業レディネス・テスト」の改訂に関する研究Ⅰ—改訂の経緯— 日本進路指導学会第26回研究大会論文集,104-105.
- 2 室山・松本・館・安達・上市・本間・笹・杉森・亀井・山形 (2004) 「職業レディネス・テスト」の改訂に関する研究Ⅱ—新しいB検査の作成に向けた予備調査の実施と結果— 日本進路指導学会第26回研究大会論文集,106-107.
- 3 松本・室山 (2005) 「職業レディネス・テスト」の標準化調査の分析Ⅰ—標準化調査の概要— 日本キャリア教育学会第27回研究大会論文集,71-72.
- 4 室山・松本 (2005) 「職業レディネス・テスト」の標準化調査の分析Ⅱ—新しいB検査の信頼性と高校生の基礎的志向性の検討— 日本キャリア教育学会第27回研究大会論文集,73-74.



図5 WORKプラス：A検査、B検査の特別集計